

(旧版)

# 音が響きわたる場所

村崎右近



## 一．俺は進む

---

俺は闇に支配された空間を進む。

広がる無明の闇は、太陽光や電灯の力不足ではない。

俺の目が光を感じる様にできていないだけだ。俺は光の反射によって物を見ることができない盲人だが、それでも世界の形を知ることは可能だ。

一步、また一步と足を進める度に、熱い空気が首元を撫で、いちいち癩に障って後方へと流れていく。この熱気は、空調によって温度を上げられた物ではない。

足元に広がるのは剥き出しの地面。砂と土。タイルもシートも敷かれてなどいない。

ガソリン、油、火薬、焼けたゴムの匂い。それらすべてが競い合うようにして鼻腔に侵入してくる。いずれも鼻につく不快な匂いだ。

熱気の正体は炎。

燃えているのは車。

炎上させたのは俺。

それ以上の情報は不要だ。

車には誰も乗っていない。勿論、死体もない。

運転席と助手席に、それぞれ一つずつ焼死体があるはずなのだが、それが無いということは、爆発する直前に脱出していたということになる。

「手間を掛けさせてくれる」

生きているのならば、見つけ出して始末しなければならない。

俺は炎上する車に背を向けて、自身の車へと歩を進める。

俺の愛車は、フォードG P W。通称・ジープ。屋根はなく、フロントガラスも取り払ったフルオープンカーだ。

運転席に乗り込み、キーを差し込む。それと同時に、後部の荷台に隠れていた何かが襲い掛かってきた。その正体は分かっている。俺が炎上させた車の搭乗者だ。

車を奪いに来ることは分かっていた。なぜなら、この地域で車を失うことは、そのまま死に直結するからだ。

ここは、アメリカ合衆国アリゾナ州に広がるソノラ砂漠。隣のカリフォルニア州と、国境を跨いだ先のメキシコ合衆国ソノラ州に広がる、北アメリカ最大の砂漠だ。

砂漠と言っても、見渡す限りの風紋が広がる砂地ってわけじゃない。随所にサボテンが生え、その周りには低木植物が群生している。

サボテンの花が咲けば昆虫が飛んできて花粉を運び、サボテンの実がなればそれを食べる動物が集まる。

キツツキがサボテンに巣穴を掘り、使われなくなった穴はねずみが再利用する。

ねずみを餌とする食肉類までもがサボテンに集い、食物連鎖を持つ小さな生態系が形成される。

雨期は年に二度、夏と冬に訪れ、それ以外は毎日が晴天となる。

サボテンを始めとする様々な植物が植生し、動物が集まるような大地であっても、人間にとっては非常に厳しい環境であることに変わりはない。

容赦なく照りつける太陽は、熱射病によって人間を死に追いやるのだ。

俺は動じることなくキーを回し、エンジンをかける。

連続した二発の銃声が響く。

俺の首に回され掛けていた二本の腕は、銃声を合図に力を失って重力に引かれた。

腕を掴んで車から落とす。すでに絶命している。何の抵抗もない。

再び二発の銃声が響く。

空から近づいて来ていたヘリのローター音が、撃たれた人物の悲鳴を掻き消した。

「ごくろうさん」

俺は額の傍で二本指を立ててヘリの搭乗者を慰労し、直後にそのままアクセルを踏み込んで、一路、南へと車を走らせた。

俺の名はトープ。名付け親はフランス人で、もぐら、という意味があるらしい。

俺は、密入国の手配と、入国後に就く仕事の斡旋を生業としている。俗にコヨーテと呼ばれる密入国斡旋業者の一人だ。

ソノラ砂漠を横断して走る国境には、不法な入国を防ぐためのフェンスが設置されているのだが、フェンスはそれほど高くはないため、大人が数人集まれば道具がなくても乗り越えることが可能だ。

だからといって、国境巡視員も素通りさせるほど馬鹿じゃない。

フェンスは市街地から数マイル離れたところで途切れるが、途切れたところは砂漠のど真ん中だ。

フェンスが設置される以前は、カリフォルニアのサンディエゴや、テキサス州の南側で比較的容易に国境を越えることができていた。

フェンスが設置されてからはそうも行かず、フェンスがない砂漠や山地を越えるルートでアメリカに密入国を試みる者が増加している。

しかし、そのルートは危険度が高い。国境巡視員に発見されることじゃない。命を落とす危険度だ。

密入国者たちは、危険を回避するために俺のようなコヨーテを利用するってわけだ。

残念なことに、コヨーテには悪質な奴らが多い。俺を含めて、まともな人間など皆無だろう。尤も、密入国させようって輩にまともであることを期待する方が間違っているんじゃないかとも思ったりするわけなんだが。

手口はこうだ。手数料を取ってアメリカに密入国させ、労働力として働かせる。

そこまでは本人が望んでいた通り。雇う側にしても、安い労働力が手に入るため、諸手を上げて歓迎する。

だが、悪質なのはこのあとだ。

自らが斡旋した就業先を、不法就労者がいるとして通報する。この際、不法就労者が逮捕されるだけで、雇い主はお咎めを受けない仕組みになっている。

その後、逮捕された不法入国者の保釈金を肩代わりするなどして、生涯にわたり上前を撥ね続

けるってわけだ。奴隷の出来上がりだ。

警察に訴え出ないのは、メキシコに残してきた家族を人質にされていたり、家族をネタに脅されたりするためだ。酷いときには、警察と雇用主とコヨーテとが結託している場合さえあるのだ。

俺はそういう他人を不幸にして食っている奴らが嫌いだ。

許せないんじゃない。

自身を正義だと勘違いしている奴らが、得意気な顔をして振りかざす、「許せない」という言葉も嫌いだ。

だから、許せないんじゃない。

ただ、嫌いなだけだ。

## 二. 俺は名を呼ぶ

---

メキシコ合衆国ソノラ州。八割以上を砂漠が占め、西側はコルテス海と面している。

主な産業は、畜産と鉱業、そしてコルテス海を利用した観光業。

州都エルモシージョから北へ二〇マイル。ノガレスという国境の街がある。

「おや、旦那。珍しいことで」

朝食を求めて喚く腹を黙らせるために足を踏み入れた店で、店主のトーマスよりも早くに声を掛けてくる人物がいた。

半端な時間のせいか、俺と声の主以外には誰も客がいないようだ。

「紛らわしい真似は止め、アントニオ」

俺は声を掛けてきた人物の名を呼ぶ。

「へへ、出会ってのは、いつでも偶然の産物なんですぜ。出会えなかったかもしれねえって考えると、自然と出会いそのものに感謝できる」

「時間と場所を指定しておいて、何が偶然の出会いだ」

アントニオはノガレスの街の情報屋だ。街の外やフェンスの向こうから来た連中に関する情報を取り扱っている。

非合法な仕事をしている以上、外から街を訪れた者に注意を向けるのは当然のことなのだが、来訪者が客かどうかを見極めているってわけじゃない。

俺たちコヨーテは、人間をフェンスの向こう側に送り届けるのが仕事。

仕事にはルールがあり、同業者間には仁義がある。

ルールは三つ。

客を盗らない。客から盗らない。人間以外は運ばない。

第一のルール『客を盗らない』

値引き合戦なんていう馬鹿げた事態に陥らないためのルールだ。稼ぎが過ぎれば、少ない者のところへ回す。尤も、仲介人がバランスを考えて割り振っているため、滅多にそういった事態にはならない。一つの業者に肩入れしていた場合、その業者の摘発と共に失業してしまうため、仲介人は複数の業者とバランスよく付き合う。

第二のルール『客から盗らない』

密入国という性質上、家財道具一式を抱えて行くわけにはいかない。それでも身に着けているものは、本人にとって大きな価値のあるものであり、今後の人生の支えとなる品物だからだ。

第三のルール『人間以外は運ばない』

言ってしまうと、麻薬だ。

メキシコ国境からアメリカ国内へと流れる麻薬は、カリフォルニアが麻薬漬けから抜け出せない要因の一つとなっている。麻薬の流入が増えれば、国境の監視はより厳しいものとなり、仕事にも支障がでる。

来訪者に注意を向けるのは、麻薬を持ち込ませないためだ。もし持ち込まれたことが判明すれば、好きに泳がせて、買った方の人物を叩く。

それが俺のような武闘派の役割ってわけだ。

「また派手に暴れなすったらしいじゃねえですか」

ルールを破った奴には、それに応じたお仕置きが待っている。第三のルールを破った場合は、最も厳しい罰が与えられる。

「久しぶりだったからかな、加減を間違えたかもしれん」

「旦那はいつも加減を間違えなさるようで」

アントニオが苦笑する気配が伝わってくる。

「なら、いつも通りだ」

トルティーヤの焼けた香りが鼻腔をくすぐり、唾液の分泌を促進させる。

「今日は旦那に仕事を頼みたいんでさあ」

「いつから仲介を始めた？」

「いえいえ、そんなじゃありません。これが最初で最後でさあ」

「急ぐのか？」

「できれば」

アントニオは声のトーンを落してそう言った。中々に急を要するらしい。

「朝食の時間ぐらいは欲しい」

「食べ終わる頃に本人を連れてきやすよ」

仕事を引き受ける前には、必ず本人と会って話しをすることにしている。話して気に入らない相手であった場合、幾ら積まれても断ってきた。反対に、気に入った相手には住む場所から仕事の世話までしたことがある。

アントニオは「ごゆっくり」と言い残して店を出た。歳は六十に近いはずだが、足取りは全く年齢を感じさせないしっかりとしたものだ。

アントニオとは四年の付き合いになる。俺がノガレスに来たばかり頃、髓分と世話になっていたものだ。

本来なら俺が敬語で話すべきなのだが、アントニオは俺を旦那と呼んでへつらう。

俺が情報屋としてのアントニオと付き合うようになった以上、そういったけじめは必要不可欠なことらしい。

朝食として俺が注文したものは、鶏肉とサルサをトルティーヤに包んで蒸した、タマーレスというメキシコでは一般的な料理だ。

トルティーヤとは、小麦粉の代わりにすり潰したトウモロコシを使った生地を、薄く円形に引き延ばして焼き上げたパンだ。トウモロコシの色が映えるものなのだが、残念ながら俺はその色を感じることができない。

目を失う前に見たことがないために、思い浮かべることもできないのだ。

今から五年ほど前、軍人だった俺は、派遣された中東における戦闘で負傷した。

なんとか命は取り留めたのだが、両目を失うという大きな代償を払うこととなった。

現在、俺の眼孔には義眼が収められている。

それはただの義眼ではなく、盲人となってしまった俺でも世界の形を知ることが可能になるといふとんでもない代物だ。

反響定位という言葉がある。

それについて説明をする際に、蝙蝠と言えば大抵の人間は察しが付く。

蝙蝠は自身が発した超音波の反射によって周囲の状況を把握しているため、暗闇の中を自由に飛び回れる。それがいわゆる動物の反響定位というものだ。

人間の耳で反響の違いを聞き分けることはほぼ不可能とされているが、稀にそういう特殊能力を持った人間もいる。特にハリウッドあたりに多い。

つまり、普通の人間の耳では、蝙蝠のような反響定位は不可能だということだ。

とはいえ、ある程度までならば把握することは可能であるし、反響の具合で物質を判断することも可能だ。

例えば、盲人が持つ白杖は中空で軽いために音が良く響き、杖が当たった物質を判断することができる。石と土では、叩いたときに全く違う音がする。

アメリカでは、白杖の使い方と共に反響定位のトレーニングを推奨している。

反響定位を行うためには、二つの条件がある。

一つは、一定の周波数と音量を持つ音を、断続的に発生させられること。

もう一つは、その反射音を聞き分ける耳を持っていること。これは、反響によって得た情報を頭の中で組み立て、メンタルマップとして組み立てる能力と言い換えてもいい。

一つ目の条件に当てはまるのは、白杖で地面を叩く音などだ。

二つ目の条件であるメンタルマップの作成については、個人の能力に依存する部分が大きく、どうしても不安定になってしまうことが問題として挙げられている。

俺もこの反響定位を利用して周囲の状況を把握しているのだが、厳密には少し違っていて、現時点では世界で俺だけにしか不可能な方法になっている。

一つだけ間違えないで欲しいのは、俺は映画館のスクリーンの中にいる連中が持っているような、特殊な能力を持っているわけじゃないってことだ。

「お待ちどうさま」

トーマスが、タマーレスを無造作に乗せたプラスチック製の皿を突き出した。

「早いな」

俺は驚嘆の声を上げた。なぜなら、注文してから十五分以上待たされるのが、この店のデフォルトだったからだ。

「九時二十五分ぴったりだろ？ トーニョがこの時間にこれを出せて」

トーニョというのは、アントニオの愛称だ。

そういえば、俺が注文する前からトルティーヤの焼ける匂いがしていた。

アントニオが俺に指定してきた時間は九時三十分。俺が店に入ったのは九時二十分だったのだが、早く来ることも見通されていたわけだ。

どうやら、このタマーレスは五分以内に完食しておかなければならないようだ。

「ビールは？」

「これから仕事なんだ、コーラにしてくれ」

「はいよ」

俺はズレていたサングラスを正し、カウンターの奥からコーラを開栓する音が聞こえてくる前に、大口を開けて極太のタマーレスにかじりついた。

アントニオは、九時三十分ぴったりに戻ってきた。

足音は二人分。一つはアントニオの足音。もう一つの足音は、その大きさと間隔、一步毎の音量比較から、体重は軽く身長が低い人物であることが窺える。

俺は瓶に残っていた三分の一程度のコーラを一気に流し込んだ。毎日飲んでいれば、目が見えなくても残量ぐらいは分かるようになる。

「この人がそうなの？」

耳に飛び込んできたのは、幼い少女の声だった。年齢は十歳前後といったところか。

メキシコの公用語であるスペイン語を話していることから、恐らくはメキシコ人。

「ああ、そうだよ」

アントニオの口調が、いつもの野卑なものから優しげなものへと変わっている。

「そういう趣味があったのか」

「止してくださいよ旦那、子供の前ですぜ」

「悪かった。品のない冗談だった」

「何も言わず、何も聞かず、しばらく旦那のところで預かって頂きたいんでさあ」

「俺は子守りじゃない」

「旦那にしかできないことなんでやすよ」

俺は立ったままだった二人に着座を促した。

「ビールってわけにはいかないな。コーラを二人に」

カウンターの奥から、トーマスの「はいよ」という小声の返事が聞こえた。

「こいつはありがたい。ソニア、お礼を言いなさい」

名前を呼ばれた少女は、「ありがとうございます」と丁寧な礼の言葉を述べたあと、俺の隣の椅子に腰を下ろした。物怖じせず人見知りしない女の子のようだ。

「ソニア、か。覚えやすくていい。俺好みの名前だ」

メキシコ人は異常なまでに名前が長い。

名前の構成は、名が二つ、姓が二つ。姓は両親の姓を一つずつ継承し、ファーストネーム、セカンドネーム、父親の姓、母親の姓、という順番で表記する。セカンドネームをつけない場合もある。

俺は長ったらしい名前を覚えるのが苦手なのだが、親子三代で名前が同じ、違うのは四つ目の母親の姓だけ、なんてこともあるため、目が見えず相手の顔や風貌で判断できない俺は、フルネームを覚える必要がある。

「お願いできやすか？」

アントニオは父親のような存在だ。尊敬も信頼もしている。

そんなアントニオの頼みなのだから、是非とも引き受けて信頼に応えたいところなのだが、生憎と俺は子供が苦手だ。嫌いなんじゃない。苦手なんだ。

「旦那、どうしやした？」

アントニオの声で我に返った俺は、大きくため息を吐く。



「なんでもない。ああ、いや。一つ確認したい」

「なんでやしょう？」

「俺に預けるってことは、そういうことなんだな？」

「そういうことでやすよ」

間違いなく厄介事だ。そして、間違いなく荒事になる。

この少女には、何かとんでもない秘密があるのだろう。おそらくそれは、ノガレスの誰かに漏れるようなことがあれば、街に居られなくなるような秘密だ。

少女は余所者で、余所の街で誰かに狙われて、ノガレスまで逃げてきた。

アントニオには少女を守りたい何らかの理由があって、俺に護衛を頼んできた。

俺にはアントニオに大きな借りがある。借りを返す絶好の機会ってわけだ。

「わかった」

「恩に着やす」

「トープだ。よろしく」

俺は右手を差し出す。

「これからしばらくの間、お世話になります」

それまでただ静かに聞いていた少女の小さな手が、俺の手をそっと握った。

### 三. 俺は謝罪する

---

ノガレスの道路は、南にある州都エルモシージョへと続く幹線道路以外のほとんどが舗装されていない。なんでも、年中を通して気温が高いため、アスファルトなどは溶けてしまうのだとか。

聞いた話なので、その真偽は定かではないのだが。

ノガレスの中心を南北に貫き、サンタ・アナを經由してエルモシージョまで続く幹線道路は、アメリカから国境を越えてやってくるトラベラーやバイカーたちに人気のあるルートの一つだ。

アメリカからメキシコに入る際には、一切の手続きを必要としていない。それはメキシコ側の怠慢でもあって、本来は複数の書類に記入しなければならない。

アメリカ側からであれば、ほぼ素通りできるのだが、アメリカに再入国する際には最低限パスポートが必要となる。

うっかりパスポートを忘れてしまい、戻れなくなったアメリカ人の再入国を手助けするのも、コヨーテの役割の一つとなっている。チップ並みの稼ぎにしかないが、それを専門として数をこなす業者もいる。

その業者は、国境係員の友人であったり、非番の国境係員であったりもするが、あくまでもパスポートを忘れてしまったアメリカ人だけに客を限定したものだ。

街の中心地から二マイルも離れると、周囲はサボテンが立つ砂漠の景色となる。

地面は砂と土だが、この辺りは比較的多くの植物が目につくため、歩いても死に直結するようなイメージは湧かないらしい。らしい、というのは、俺が直接見たわけではないからだ。

軍人時代のアリゾナ演習で見た砂漠と同じらしいのだが、あの頃は何もかもが必死だったから、景色などはほとんど覚えていない。

砂漠と聞いて俺が思い浮かべるのは、やはり中東で見た砂漠だ。

目を失った場所であるという不快な印象しかない。

「よし、着いた。歩かせてすまなかったな」

俺は謝罪の言葉を述べる。気持ちは少しも入っていないが、言わないよりはマシだ。

ソニアが逐一丁寧に丁寧な物言いをしてくるので、こちらもそうしなければならないような気分になってしまう。

トーマスの店を出て、俺の愛車が止めてある街外れまで歩いてきたところだ。

「ふあ、大きい」

目印はそびえ立つ一本のサボテン。ソノラ砂漠の固有種であるサワロ・サボテンだ。

ソニアは、口を開けてサワロ・サボテンを見上げていた。巨大なものになれば、高さは十四ヤードにも達し、最大重量は十五トンにも及ぶ。

「サワロは初めてか？」

「はい。写真やテレビでは、何度も見たことがあったのですけれど」

丁寧な言葉使いは、彼女の育ちのよさを余すことなく伝えてくる。しかし、粗野な俺には少しばかり耳障りでもある。

「これから向かう場所には、嫌というほどのサワロがある」

俺は一足先に車に乗り込み、助手席のシートに積もった砂を払い落とした。

「それは楽しみですね」

俺の愛車フォードG P Wは、二輪駆動と四輪駆動を切り替えられるパートタイム方式の四輪駆動車であり、さらには運転席にあるレバーでタイヤの空気圧を変えることもできるため、街中でも砂漠の荒地でも難なく走ることが可能だ。勿論、改造車だ。

ノガレスから西へ。ソノラ砂漠に進入する。

国境を右手にしばらく走った後、植物よりも剥き出しの地面の割合が多くなった頃に、俺は車を止めてエンジンも切った。

「どうかしたのですか？」

ソニアが怪訝な声を出す。しかし、不安よりも好奇心の方が僅かに強いようだ。

俺は後部の荷台から望遠鏡を取り出して、ソニアに渡す。

「あっちに土煙が見えるはずだ」

「んー。ああ、ありましたありました。向こうに移動しているみたいですね」

ソノラ砂漠の真ん中には、国を隔てるフェンスが存在していない。そのため、砂漠からのアメリカ入国を試みる密入国者が後を絶たず、近年カリフォルニアとテキサスに増設されたフェンスのおかげで、さらなる増加傾向にある。

「あれは何なのですか？」

「ドライブ・スルーだ」

最も単純な国境の越え方は「ドライブ・スルー」と呼ばれる方法だ。

砂漠を車で突っ切ることで、問答無用で国境を越える。勿論、捕まる危険もある。途中で国境巡視員に発見されてしまった場合は、メキシコ側まで全速力で戻る。

この方法でアメリカに運び込まれるのは、ほとんどの場合、麻薬だ。

砂漠は非常に見通しが良いため、発見されやすい反面、逃げやすくもある。

「国境巡視隊のヘリが飛んでやがるから、あのままだと発見されるだろう。そうなれば、俺たちも巻き添えを喰らっちゃうからな。しばらく待機だ」

「あれは、悪いことをしているのですか？」

「そうだな、真っ当なものは積んじやないだろうな」

「麻薬、ですか」

「おいおい。子供がそんなことを口にするもんじゃなげ」

「私、麻薬なんか嫌いです」

「そりゃ良いことだ」

後部の荷台から帽子を取り出して、ソニアの頭に被せてやる。いわゆるカウボーイハットで、アントニオの忘れ物だ。俺の帽子じゃない。

砂漠の陽射しを直接浴び続けるのは酷ってもんだ。

子供は、苦手なだけで嫌いじゃない。言っておくが、俺はこれでもフェミニストだ。

「どうして麻薬なんて物が存在するのでしょうか？」

「さあな」

ソニアからは、麻薬に対する強い憎しみが感じられた。嫌いなんてものじゃない。

麻薬に対して憎しみを持つまでに至った経緯は知らないが、余程のことがあったのだと推測するのは容易いことだ。

だからといって、俺にはそれを解決してやる義理などではなく、その必要もなければその気もない。

俺の役割は、この子の安全を確保することだ。アントニオが警察組織を頼らなかったのは、この子の素性を知られなくなかったからだろう。

ならば、俺も知らない方がいい。

下手に知ってしまえば、口出しをしてしまうかもしれない。下手なことを言って、機嫌を損ねられでもしたら、その方がずっと厄介だ。

「あれだけ離れば大丈夫だ」

ソニアは未だに不快な空気を発していたが、俺は構わずにキーを回してエンジンに火をいれた。

目的地に到着するまでに、彼女の機嫌が直るような何かがあればいいのだが。

俺はそんな幸運に巡りあえるようにと願いながら、アクセルを踏み込んだ。

ソニアを連れて向かったのは、他ならぬ俺の家だ。ソノラ砂漠の中では、植物の比率が高い地域にある。

二年の時間を費やして自力で掘った、家と呼ぶには申し訳ない洞穴だ。付近には、ネズミや毒蛇、毒トカゲが多く生息しているし、人間ではない獣のコヨーテもいる。

とてもじゃないが、俺は街中には住めやしない。

俺はノガレスのルールを破った者に対してのお仕置きを実行しているが、その報復を企てる奴らがいる。客を装って俺に近づき、隠し持っていた銃で、ズドン、だ。

アメリカに麻薬を持ち込ませないために、客の所持品はすべて検査しているのだが、俺の場合は身を守るためでもあるってわけだ。

尤も、銃を隠し持っていれば火薬の匂いですぐに分かるのだが、大抵の場合は銃撃戦になってしまう。街中でそんなことをやられてはたまらない。

かつて住んでいたノガレスの家に、問答無用の襲撃を仕掛けてきた連中もいた。返り討ちにしたが、後始末が大変だった上に、近隣の住人に多大な迷惑を掛けてしまった。

こう見えても、俺はご近所付き合いは大切にしていたんだ。

「えっと、あの」

ソニアの困り果てた声が俺の耳に届いた。

「どうした？」と俺が訊ねても、聞こえてくるのはハッキリしない返事ばかり。

俺は光を必要としないのだから当たり前の話だが、洞穴の中には照明がない。唯一あるのは、アントニオが訪れた際に置いていったランタン一つだ。

到着した際に火を灯して渡しておいたし、いまま炎の揺れる音と匂いがすることから、ランタンの火はまだ消えていないことが分かる。

つまり、ソニアが困っているのは明かりの問題ではないということだ。

「ああ、なるほど」

少し考えて、一つの答えに辿り着く。

俺の家に無いもの。電気、ガス、水道。つまり、トイレだ。

俺は男だからその辺で済ませてしまうのだが、さすがに十歳の女の子にそんなことをさせるのは、あまりにも忍びない。

だが、どうしようもない。

「すまない。今日だけは我慢してくれ」

俺は、何年振りかに心の底から申し訳ないと思い、同様に、何年振りかにその思いを言葉にした。

「トープさん」

ソニアが俺の名を呼んだのは、夜も更け、ランタンの灯りが消されてしばらく経ってからのことだ。

「眠れないのか？」

「トープさんは、目が見えないと聞きました」

アントニオから聞いていたのだろうが、それでよく俺の運転する車に乗ろうという気になれたものだと感心する。

「そうだな。周りの人間が見ているものは見えないな。だが、不自由はしていない」

「どうして目が見えなくなってしまったの？」

「神様に、もう何も見たくない、とお願いしたんだ」

「嘘ですよ？ 子供扱いは止めて欲しいです」

「戦争で、な」

「痛かったですか？」

「もう覚えていない」

「私の目が見えていなければ良かったのになって思うんです」

ソニアの声は暗く沈んでいた。

おそらく、ソニアは何かを目撃してしまったのだろう。

ソニアの口ぶりから、本人は見たくなかった物事であると推測できる。

友達、いや、家族が関係しているのだろう。それも兄弟姉妹じゃない。両親のどちらかだ。そうでなければ、家庭内で済んだ話だ。まさか、父親か母親の浮気現場を目撃した、なんてことはないだろう。

そんなことでアントニオが動くはずがない。

「トープさんは、ずっと一人でここに住んでいるんですか？」

「ああ、そうだな。二年になる」

「一人で寂しくないですか？」

「一日中ここにいるわけじゃない。それに、大人なら寂しいなんて思わないものだ」

「お父さんとお母さんも、私がいなくても寂しくないのでしょうか？」

「ソニアはどうだ？ 両親がいなくなっても、寂しくないか？」

「寂しい、です」

「だったら、ソニアの両親も同じ気持ちのはずだ」

「トープさんには、いなくなったら寂しいと思う人はいないのですか？」

子供という生き物は、遠慮なしに傷を抉る。悪気がない分、タチが悪い。

「もう眠れ。明日は遠出をする」

少し強めに言い放つと、ソニアが萎縮する気配が伝わってきた。

すん、すん、と鼻を吸る音も聞こえてくる。どうやら泣かせてしまったらしい。

まったく。これだから子供は苦手だ。

## 四. 俺は約束する

---

俺は夢を見る。

場所は中東の国イラク。バグダッドの西、ファルージャ。

互いに自らを正義と信じ、互いに相手を悪だと罵る。

市街地での銃撃戦。そこにあるものは、鉄、血、火薬、砂、土、そして死体。

バリバリという雷鳴のような轟音が鳴り止まず、撃たれて倒れる悲鳴すらも聞こえない中であって、俺は引き鉄を絞り続けていた。それだけが存在価値であるかのように。

不意に銃声が止み、部隊は前進を始める。

道端に倒れていた武装勢力の男が、急に息を吹き返して銃を乱射する。死んだフリをしていたのだ。

部隊は冷静に、且つ、素早く対処する。こうした死んだフリや投降するフリをしての奇襲攻撃は、これまでに何度となく繰り返されていた。

兵士たちは、道に転がっている武装勢力の死体に、次々と銃弾を打ち込んでいく。

感覚はあっという間に麻痺した。

奪わなくて済む命なら、奪ってしまいたくない。

そんな気持ちが残っていたのは、最初の銃撃戦の終わりまでだった。

奴らは狡猾だった。

投降した無抵抗の人間を射殺したと広めれば、国内外の反米感情が高まる。投降したフリが受け入れられたら、内部の奥深くで自爆し、大きな損害を与える。

奴らは戦士だ。死を恐れていない。米兵を排除するためならば、何の躊躇もなく命を捨てる。彼らにしてみれば、捨てているのではなく捧げているのだろう。

だが、米兵は兵士だ。人間だ。死にたくはない。最終的には自分の身を守る選択をするようになり、問答無用で射殺するようになってしまう。

そうして、死んだフリや虚偽投降が通じなくなると、次は女子供の出番となった。

子供が歩いてくる。男の子だ。小さな男の子。歳は十にも満たないのだろう。

その小さな手に、幼い少年にはあまりにも不似合いな箱を抱えて、ゆっくりと歩み寄ってくる

。

俺は叫んだ。止まれ、その箱を置くんた、繰り返し叫んだ。

それでも少年の歩みは止まらない。頼むから止まってくれ、という懇願にも似た祈りも届きはしない。

指を引き鉄に置き、照準は爆弾と思われる箱を避けて、少年の額に合わせる。

ひゅー、ひゅー、と空気が乾いた音を立てて気管を往復する。

涙で視界が滲んだ。

こんな幼子を兵器として利用する奴らも、こんな幼子を兵器と見なして射殺するしかできない

自分たちも、どちらにも正義を語る資格などないように思えた。

そんなものは、現実から目を逸らした者が口にする甘ったれた戯言だ、と分かっているながらも、そう思ってしまった。

銃を構える俺の目の前に到達した少年は、笑いながら箱を差し出し、俺は少年が差し出した箱に手を伸ばす。それは、俺が自分の目で見た最後の光景となった。

殺すか殺されるか。

俺は、ハッキリしていて分かりやすいその現実を、受け入れられなかったのだ。

「トープさん、おはようございます」

「おはよう。ソニア」

「もしかして、まだ寝ていました？」

「いや、大丈夫だ」

本当は寝ていた。

誰かの声で目を覚ますのは、いつ以来になるだろうか。と、そんなことを思い出そうと試みることもさへも、随分と久しぶりのような気がした。

「あそこにあるヴァイオリン、触ってもいいでしょうか？」

「弾けるのか？」

「少しですけど」

「聴かせてもらおうか」

それで少しでも気が紛れるのならば。俺はそう思っていた。

電気もなければトイレもない。娯楽など何一つとしてないこの洞穴に、普通の人間が長時間滞在すれば精神の崩壊を招く恐れがある。ましてや十歳の少女なら尚更だ。

嬉々としてヴァイオリンを取り出したソニアは、その場で構えて弾き始めた。

緩やかで自由な旋律は、無伴奏ヴァイオリンソナタ第一番ト短調。ヨハン・セバスチャン・バッハが作曲したヴァイオリン独奏の名作。

ヴァイオリンの音は、狭い洞穴内でいつまでも反響を繰り返す。

その残響音は、俺を回顧の旅へと誘った。

俺は音大の学生だった。

大学院に進む奨学金を貰うため、志願兵となった。

兵役が残り一年となった年、イラクへの派兵が始まった。奨学金という見返りのために入隊した志願兵は、戦時に退役することは許されない。

俺はイラクに派遣され、ファルージャの戦闘で負傷した。

即日のうちにアメリカに運ばれ、ある特殊な手術を受けた。

頭蓋骨に存在する副鼻腔と呼ばれる空洞に、超音波振動子と受振機を埋め込み、反響定位を実現するという人体実験だった。

光を失った絶望と混乱の中にいた俺は、その実験に自分を提供してしまった。

超音波は、セラミック製のピエゾ素子によって発生させている。

受振機は、超音波の反射を感知して周囲の状態を割り出し、専用の擬似眼球を通して情報を脳に送る。



あくまでも反響によって感知した情報を基に作り上げた虚像であって、光を感じているのではないため、送られる情報には色がない。

他にも数人が同様の手術を受けてたらしいのだが、俺のように自由に歩くことはできなかったらしい。

たまたま成功したのか、俺に適正があったのかは分からないが、俺は再び世界の形を知ることができるようになったのだ。

俺が立ち上がると、ソニアはピタリと演奏を止めた。

自分の演奏が、俺の気分を害してしまったと思っているのだろう。

「もっと自由に楽しみながら弾くといい。楽しまなければ音楽ではない」

俺自身は優れた奏者ではなかったが、感覚的な助言ならばしてやれる。

ソニアの演奏は隙の少ないものだったが、哀しきかな、楽譜をなぞっただけだ。とはいえ、十歳にして譜面通り正確に弾ける技術は驚嘆に値するものだ。

「トープさんもヴァイオリンを弾かれていたんですね。私にも聴かせてください」

偉そうなことを言ったが、俺のヴァイオリンは下手の横好きというやつだ。技術ではソニアの方がずっと上手い。わざわざ聴かせるほどの腕前ではない。

「朝食に行く」

「はい」

ソニアは悲しげに返事をした。

「食後に弾いてやる。ヘタクソだが笑うなよ」

「はい！」

ソニアの返事は、ヴァイオリンの音に負けない反響をみせた。

さっそく出掛ける準備を始める。

俺の準備は、日差し避けのショールを巻くだけで終わる。洞穴の中には朝になっても太陽の光が入らないため、ソニアは準備に手間取っているようだ。

「トープさん、大変です！ 車がありませんよ！」

準備を終えて外に出たソニアは、開口一番にそう叫んだ。

「心配ない、こっちに向かっている」

「どういうことですか？」

反響定位による周囲の把握が可能となった俺は、アリゾナ州の州都であるフェニックスへと移された。

フェニックスでは、ブレイン・マシン・インターフェイスの研究が行われていた。

人間の脳からの直接命令による、無人兵器の遠隔操作。それが、実験体として俺が参加することになった研究だった。人間の脳に人為的に手を加えるという行為が倫理面で問題となるため、この研究は公にされていない。俺が死んだことにされているのはそのためであり、トープ・ソノラという新たな名前を与えられたのも、ここへ来たときだった。

フェニックスでは、カメラと脳とを接続させる実験も同時進行されていたが、その映像は不鮮明であり、軍事利用に耐え得るものではなかったらしい。

国防総省の機関であり、軍用技術の研究を行っている国防高等研究計画局は、光による影響を受けない反響定位に、何らかの可能性を見出したらしい。

一通りの説明は受けたのだが、俺には難しすぎて分からなかった。

地平線から走ってきた無人のフォードG P Wは、ソニアの真横にピタリと停車した。

ソノラ砂漠では、視界が良好であれば八十マイル先まで見通せるのだが、どこかの学者によれば、地平線までは僅か三マイルしかないらしい。

驚きのあまりに声を失っているソニアを、背後から一気に抱きかかえて助手席に座らせる。それでもソニアは未だに信じられないらしく、口が開いたままになっていた。

このフォードG P Wは、俺が一番最初に遠隔操作を行った無人兵器だ。

俺の頭と同じように、超音波振動子と受振機が搭載されている。電波で送られてくる情報を受信することで、眼孔の擬似眼球に映し出すことが可能だ。

電波の送受信には、中継アンテナを使っているが、馬鹿正直にそんなものを設置したりはしていない。

中継アンテナは、ソノラ砂漠のシンボルであるサワロ・サボテンに偽装した状態で、砂漠全域を網羅するように設置されている。

夜間に車を近くに置いていないのは、この場所が突き止められるのを防ぐためだ。

洞穴の入口を隠しても、車が止めてあれば、付近にいると言っているようなものだ。

「さぁソニア、朝食の希望はあるかな？」

食事を楽しもうという気になったのは、随分と久しぶりだ。

俺は自分でも気付かないうちに、ソニアに心を開いていたらしい。

## 五. 俺は調べる

---

トーマスの店で、ソニアと並んでタマーレスにかじりついた。

「アントニオは来てないのか？」

「今日は見てないな。コーラは？」

盲人である俺は、目配せによる合図を読み取ることができないため、言葉の暗号に頼らざるを得ない。

平常時はビールを、問題があるときはコーラを、命に関わる場合はテキーラを勧めるのが、トーマスとの約束事だ。

アントニオの身に何らかの問題が発生しているということ。

店の中に客を装った見張り役がいるということ。

判明しているのはこの二点だ。

「やめておくよ」

最後の一口を放り込む。

ソニアは俺よりも先に食べ終わっている。

「おじさん、早く行こう」

ソニアはそう言って、俺の腕をぐいと引いた。

何らかの緊張を読み取って、俺を名前ではなく「おじさん」と呼んだのだろう。

賢い娘だ。だがそれは、年齢に見合わない苦労を経験している証でもある。

車をいつもの街外れではなく店の近くに止めておいたのだが、正解だったようだ。

南のサンタ・アナに向かって幹線道路を走り、途中で道を外れて砂漠に入る。道なき道を走れば、相手は開き直って追跡を続けるか、尾行を中止するかのどちらかしかない。

追跡は二台。相手は開き直る選択をしたようだ。速度を上げて距離を詰めようとしている。どうやら、開き直りすぎて実力行使に出るつもりらしい。

分かりやすくていい。実に俺好みの選択だ。

「トープさん」

ソニアは不安そうに俺を呼ぶ。

俺はソニアの頭にアントニオの帽子を被せた。

「大丈夫だ。すぐに終わる」

気休めなどではない。ここソノラ砂漠は、俺の狩場なのだから。

「システム起動」

声と同時に世界が広がる。

俺の意識は、サワロ・アンテナを介して、上空二万マイルの衛星軌道上にある準天頂衛星に繋がる。

システムオールグリーン。正常に作動している。

「目標捕捉」

捕捉した目標とは、後ろを走っている二台の車のことだ。

このソノラ砂漠には、あらゆる場所にサボテンなどの植物に偽装した観測装置が設置されている。俺は、それらから送られてくる情報によって、何処に何があるのかを把握できるというわけだ。勿論、把握するだけでは終わらない。

俺の本領は、人間の脳からの直接命令による、無人攻撃兵器の遠隔操作なのだから。

「照準固定」

照準は右前輪。攻撃に使用するのは、長距離狙撃用の単発式ライフルを二つ。

「弾薬装填、安全装置解除」

ブレイン・マシン・インターフェイスによる操作は、本来ならば声に出す必要などは全くないのだが、声に出して目的を明確にすると、不思議とスムーズに進む。

細かい動作は勝手にやってくれる。俺がやるのは、攻撃目標の設定と装弾、発射のトリガーを引くだけだ。

連続した二発の銃声が響く。続いて、スピンした車が砂地を削る音が聞こえてきた。

「終わったぞ」

俺はアクセルを緩め、ソニアを緊張から解放させた。

砂漠の中で車という移動手段を失ったわけだが、街からはそう離れていない。タイヤを交換することも、ノガレスに歩いて戻ることも、どちらでも可能だ。これで命を落とすようならば、運か頭のどちらかが悪かったということだ。責任を問われても困る。

ソニアは、背後を振り向いて車がないことを確認したあとに、ようやく安堵のため息を漏らした。

そうして沈黙の時間が訪れる。

ソニアの身体全体に、聞かれない、という空気が漂っている。

勘なのだが、ソニアは自分が狙われていることだけではなく、狙われる理由も知っているのだろう。もしかしたら、相手の正体も知っているのかもしれない。

アントニオはその辺りの事情を知っているのだろうか。

何も聞かずに、と言われていたが、さてさてどうしたものか。

砂漠を走ること数時間。

到着したのは、アメリカ合衆国はアリゾナ州にあるツーソンという都市。

ソノラ砂漠の東端に位置するツーソンには、ノガレスから車で一時間ほど北に走ることで到着する。それは国境がなければの話だ。

メキシコ国内をうろついてソニアを危険に晒すよりも、国境を越えてアメリカに入ってしまった方が安全だと判断し、砂漠の真ん中を突っ切ってアメリカに入った。

ツーソンには俺が自由に使える一軒家があり、普段は国防高等研究計画局の関係者が住んでいる。年に二回ある雨期の間は、そこで過ごすことにしている。

ツーソンの北にあるフェニックスまで行けば、高層マンションに俺専用の部屋が用意されているのだが、そこを利用するのは年に数回といったところだ。

高いところはあまり好きじゃないんだ。

「あら、雨期にはまだ早いわよ」

別荘の管理人、アミー・マーティン。

彼女は自身の年齢を「二十七」と言い張って憚らないのだが、三十代の後半に差し掛かっているのは間違いない。

初めて会ったときからずっと「二十七」なのだから、よしんば最初は本当の年齢を口にしていただけとしても、出会ってから四年が経過している現在は、少なくとも三十路を超えている計算だ。

「あらやだ。貴方ってば、そういう趣味があったのね」

「子供の前だ。品のない冗談は止せ」

そう言いながら、以前同じことを口走った自分を思い出して苦笑う。

「この子はソニア。事情があって預かっている」

「ソニアです」

「こちらの『おねえさん』は、アミーだ」

「よろしく」

二人が握手を交わしている間、俺は何となく居場所を失った気分になった。

「連絡してくれたら、ご馳走を用意して待っていたのに」

「缶詰なら食べ飽きている。ソニアにシャワーを浴びさせてやってくれ」

「最近のご馳走は、デリバリーピザなの」

アミーはソニアを連れてバスルームに向かった。

リビングに残った俺は、身体を投げ出すようにしてソファに身を預けた。

ブレイン・マシン・インターフェイスによる遠隔操作は、体力を著しく消耗する。それは肉体的なものではなく、頭脳労働を行った際に消耗する類のものであり、単純な睡眠だけでは完全な回復が見込めない。

長時間の連続した遠隔操作を行うと、脳は多大なストレスを受けることになる。

ストレスの解消法として、アルコール、運動、そして音楽。

アルコールについては、酔いによる誤作動を防止するために禁じられているのだが、飲んだところでお咎めを受けることはない。本音は、アルコールに酔った際のデータも採集したいのだろう。

ツーソンの家には地下室があり、各種運動機具とグランドピアノが置かれている。

ここならば何も気にすることなく演奏できるし、アミーはピアノを始めとした複数の楽器に通じている。少なくとも、ソノラ砂漠の穴蔵にいるよりは楽しめることだろう。

なにより、ここにはシャワーとトイレがある。

「何か食べる？」

バスルームから戻ってきたアミーは、そのままキッチンへ素通りする。

「俺はいい。ソニアに合わせてやってくれ」

「あの子ども同じことを言っていたわ」

前後して、冷蔵庫の開け閉めが行われた。

「トープ。貴方、誘拐犯になっているわよ」

「なんだと？」

「あの子の写真がニュースに出ていたわ。フアレスで誘拐されたそうだけど」

メキシコ合衆国チワワ州の最大都市であるシウダー・フアレスは、東西に走る国境の中央付近にある。国境となるリオグランデ川を挟んで、アメリカ合衆国テキサス州のエル・パソと一つの経済圏を形成している。

両市では収入に数倍の格差があり、フアレスに住んでいるがエル・パソで働いているという者は数多い。大半が不法な入国を繰り返している。

フアレスでは、夜のうちに川を歩いて渡るのが一般的な密入国の方法だ。フアレス周辺のリオグランデ川は意外に浅く、膝下までしか濡らさずに川を渡れる場所がある。

そのためアメリカへの麻薬流入が激しく、多数の麻薬密売組織が居を構え、組織同士の争いや警察との衝突が日々絶えることなく繰り広げられている。

「調べてもらえるか？」

誘拐という形で表沙汰になった以上、調べないわけにはいかない。

俺は、アントニオに対する詫びの言葉を頭に浮かべた。

「貴方の目を使わせてもらえるのなら、すぐに調べられるけど？」

アミーはコンピュータのスペシャリストだ。いわゆるハッカーであり、以前は産業スパイをやっていたらしい。ブレイン・マシン・インターフェイスに興味を持ち、自ら名乗り出て計画に参加したのだと聞いている。

「勿論、そのつもりだ」

「準備するわね」

テレビ局や警察のデータベースに不正にアクセスし、必要な情報を取り出す。これが普通のハッキングと呼ばれる行為。これは参照履歴などで発覚し、侵入経路を辿られてこちらの正体を突き止められてしまう可能性がある。

だが、俺の目を使用した場合は少々異なる。容量の次元が違う。セキュリティを潜り抜ければ、システムをまるごとごっそり頂いてしまえるのだ。

こうした不正アクセスは、いままでに何度か行ってきた。汚職や脱税の証拠などを山のように見てきたし、圧力によって揉み消された、上院下院議員やスーパースター、それらの子供が引き起こしたスキャンダルの類も、掃いて捨てるほど知っている。

「システム起動」

声と同時に意識は上空二万マイルの衛星軌道に飛ぶ。

システムオールグリーン。感度は良好だ。

衛星にはカメラが取り付けられているが、俺は直接その映像を見ることはできず、カメラが捉えた映像を組み換えた情報が、擬似眼球に映し出されるのみに留まる。

俺が見ているのは、経線、緯線、そして国境線までもが引かれている世界地図のデータでしかない。どこかの国の宇宙飛行士が、宇宙からは国境が見えなかった、と言ったそうだが、地上にはハッキリとした金属フェンスの国境が存在し、拡張され続けている。

ハッキリしているのは俺好みなのだが、こればかりは好きになれそうにない。

「ポート解放。チャンネル接続」

「オーケー、接続したわ」

アミーは僅かに興奮した声を発した。ハッキングは彼女にとって至福の時間なのだ。どういう状況で誘拐されたことになっているのか。現場はどこになっているのか。ソニアの素性、アントニオとの関係、ソニアを狙っていた者たちの正体。アントニオの安否と所在。

調べなければならないことは、まだ他にもある。

「ソニアがシャワーを終える前に済ませよう」

「そうね、まずはどこから行く？」

「エル・パソ情報センターだ」

## 六. 俺は楽しむ

---

俺はシウダー・ファレスの街に足を踏み入れた。

この街では、麻薬密売組織同士の抗争と、それを取り締まるメキシコ警察との間で起こる銃撃戦が、場所も時間も選ばれることなく発生する。

それを引き起こしているのは、国境の存在でもなければ、南北の経済格差でもない。

麻薬。すべてはその一言で説明できる。

麻薬に関する情報を扱っているエル・パソ情報センターのデータベースに侵入し、ファレスの麻薬密売組織に関する情報を入手。そのままセンターを経由して、バージニア州アーリントンにある麻薬取締局本部にも侵入し、ファレスの動向に関する情報を手に入れたことで、騒動の輪郭を掴むことができた。

ソニアの母親はアメリカ人で、麻薬取締局の特殊捜査官だった。ただし、元が付く。

彼女の父親は、重度の麻薬中毒だった。幼い頃に麻薬が絡んだ事件で母親を失った彼女は、その憎しみから麻薬取締局の特殊捜査官になった。

アメリカ各地で実績を挙げた彼女は、ファレスでの潜入捜査に志願し、麻薬密売組織の男に近づいた。それが、アントニオの息子だ。

彼女は、憎んでいたはずの麻薬に溺れる男を愛してしまった。母親と同じように。そうしてソニアを産んだ後、やはり母親と同じ運命を辿ることになった。

ソノラ砂漠で俺の家に泊まったとき、ソニアが寂しくないのかと訊ねてきたのは、自分に会いに来ない母親を想ってのことだったのだろう。

ソニアはアントニオの孫だったわけだ。

それでも、いくつか腑に落ちないことがあった。

アントニオは麻薬を忌み嫌っている。密売組織の一員となった息子とは、親子の縁を切っているとは思議ではない。むしろ、親子の縁を切っていると考える方が自然だ。

そうであれば、アントニオにはソニアを保護する理由はないはずだ。

ソニアが誘拐されたことになっているのは何故か。

麻薬を憎んでいたソニアの母親は、どうして密売組織の男に惹かれたのか。

この三つの疑問は、たった一つの仮定で解決する。アントニオの息子も、麻薬密売組織を潰すために潜入していたのだという仮定だ。

志を同じくした者同士が惹かれあうのは、至極自然の流れだ。

組織に大打撃を与える情報を掴んだアントニオの息子は、身の危険を察し、それをソニアに託してアントニオがいるノガレスに向かわせたのだろう。

その情報も察しは付いている。テキサスの州議会議員が関与しているという噂は、以前から流れていたものだ。

おそらくアントニオの息子は生きていない。アントニオもそれを察し、何も言わずにソニアを俺に預けて、息子の仇を取りに単身ファレスへと向かったのだ。

アントニオは、私怨に巻き込みたくなかったのだろう。



ファレスはサワロ・アンテナの範囲外にあるが、俺個人の活動には何の支障もない。

ブレイン・マシン・インターフェイスによって遠隔操作が可能な無人兵器は、ソノラ砂漠にのみ設置されている。トープ・ソノラという俺の名前は、ソノラ砂漠でしか生きられないもぐらという意味の蔑称だ。いまの俺は巣穴から這い出たもぐら野郎ってわけだ。

巣穴の外に出たもぐらは、餌を獲ることができずに餓えて死んでしまうらしい。

縁起でもない話だが、何の準備もなしに乗り込めば、そういう運命が待っていることぐらいは分かる。俺はそこまで馬鹿じゃないし、自惚れてもいない。

なので、しっかりと準備をしてきた。

「いまからてめえらを潰しに行く」

そうハッキリと宣戦布告をしてきた。

賢い奴は逃げる。追い掛けたりはしない。ここでは、街を離れた瞬間に他の奴らに居場所を奪われる。そうなれば、二度と街に戻ることはできない。

大物は迎え撃つ。だがその選択は誤りだ。何もかもを失うことになる。考えてみろ、アジトを突き止められた瞬間に、その組織は終わっているに等しい。

そうして生まれた空白地帯は、新たな抗争の火種となる。

何度も言うが、これは自惚れではない。無人兵器の遠隔操作など、ただの付録だ。

目が見えなければ、容姿に惑わされることもない。武器を持った何か、ただそれだけが知覚できればいい。大きい小さいかは、然したる問題じゃない。

重要なのは、武器を所持しているかどうか。

優先されるのは、倫理などではなく我が身。

武器を向けてくる相手に対し、俺は冷徹に引き鉄を引く。テレビゲームのモンスターに対するように。淡々と。冷徹に。冷酷に。

俺に擬似眼球を埋め込んだ奴らは、反響定位で周囲を知覚する人間を作りたかったのではないのだ。

俺が中東の砂漠で失ったものは、光などではない。

ファレスの西側にある山の麓。俺が目指す麻薬密売組織のアジトはそこにある。敷地を塀で囲んだ二階建ての豪邸は、メキシコには似合わない外観をしているらしい。

鉄柵で閉ざされた入口には見張りが立っていた。人数は二人。

「止まれ、何者だ」

見張りの男は、車で近づいた俺を制止する。

俺は両腰のホルスターから愛用の拳銃ガバメントを一丁ずつ抜き、一斉射する。即座に撃鉄を起し、標的を変えて再び斉射。四五口径の鉛弾は、肉を捻じ切って人体に侵入したのち、貫通することなく体内に残留することでより深い損傷を与える。金属板などの硬い物質に対してではなく、軟らかい人体に対して高い威力を発揮する弾丸だ。

実に俺好み。

断っておくが、俺は殺人狂じゃないし、銃が好きなのでもない。

ハッキリしていて分かりやすいもの。それが俺の好み。

二人の見張りは呻き声を上げながら倒れ込む。それに先んじて、カコン、ガシャン、という

スチールとアルミの間抜けな音が、剥き出しの地面の上を跳ねた。

議員の汚職だとか、警察の内通者だとか、そんなことには一切興味がない。

麻薬という分かりやすい悪を相手にすることで、イラクでの、ファルージャでの行いを清算し、塗り換えたいだけだ。

俺は車から降り、見張りが落とした拳銃を拾う。材質、重量、そして何よりその特徴的なフォルムから、すぐにその拳銃がベレッタであると分かった。

ベレッタは非常に優れた拳銃だが、暴発を防ぐために施された様々な安全機構を解除する時間の分だけ、第一射を遅らせてしまうという欠点を持つ。

足元で聞き苦しい声を発し続けている二人に、奪ったベレッタの九ミリパラベラムを二発ずつ打ち込んで黙らせた。手入れは行き届いていないが、いい銃だ。

壁の向こう側が俄かに慌しくなった。八発もの銃声がしたのだから当然だ。

中の奴らは、侵入者が俺だということを把握できているだろうか？

わざわざ宣戦布告までしてやったんだ。逃げるなよ、俺と楽しもうぜ。

「システム起動」

声と同時に、俺の意識は上空二万マイルの衛星軌道の上に飛ぶ。

サワロ・アンテナがなければ、代替品を用意すればいい。通信能力は極端に低下してしまうが、精度などは求めている。

コンディショニンググリーン。チャンネルロック。システム、制限付きで稼動中。

「照準固定」

照準はいわずもがな。使用するの、俺の愛車フォードG P Wの荷台に搭載してある、M k ー九グレネードマシンガン。一分間に最大で四十発の榴弾を発射する大物だ。

「弾薬装填、安全装置解除」

初弾は照準からは外れていたが、門を破壊するという目的は果たした。

破壊した門をくぐって敷地内に入った俺の頭上を、次弾が高速で通過する。三発目までは爆薬が詰まった対物弾が発射され、建造物を破壊する。

三発目のグレネード弾は、見事に正面玄関を吹き飛ばした。

続く四発目と五発目は、射角を変えて煙幕弾を発射する。頭上を煙幕で覆い隠し、上階からの狙撃を防ぐためのものだ。

六発目は音響閃光弾。煙幕に消えた姿を捉えようと目を凝らす相手を嘲笑う一発。

その後は順番に一発ずつ。時折、同じ弾が二発続くように装弾してあって、残弾数が分かるようになっていく。

音と光と煙。その三つを効果的に使って視覚と聴覚を奪うことで、一方的な制圧を可能としている。煙の中で、音に頼って気配を探ろうにも、音響弾対策で自ら耳を塞いでしまっているのだ。見通せる者などいない。

正面玄関に入ってすぐのエントランスホールで、六人に鉛弾を打ち込んだ。二階に上がる階段では三人。二階廊下で更に二人。その全員が銃器を手にしていく。

鉄と血と火薬の匂いが、ゆっくりと確実に俺の鼻腔を侵食し、眼孔に収められた擬似眼球が、

ここにあるはずのないものを映し出す。

ここに、爆弾を抱えて笑う少年がいるはずなどないのに。

引き鉄に置かれた指以外の全身が、金縛りにあったかのように動かなくなる。

指は、自分を動かせと主張を繰り返す。助けたいと願って差し伸べた左手を無視してまで、自身が確実に生き延びるために引き鉄を引こうとしたあの指は、脳の中の引き鉄を引こうとしている。

「勝手に動くんじゃねえよ！」

俺は塗り替えたのだ！ ファルージャでの忌まわしい記憶を！

俺は我に返る。そうして、目の前にいるのは箱を抱えた少年ではなく、銃を構えた麻薬組織の男だという現状を把握する。

「チィ」

俺の舌打ちは、ほぼ同時に起こった三発の銃声に掻き消された。

左肩に激痛が走る。弾は貫通しているが左腕は使えそうにない。右側へ倒れこむように回避行動を取っていなければ、胸のど真ん中に風穴が開いていたところだ。

不意に、グレネード弾の砲撃が止む。

撃たれた影響で、ブレイン・マシン・インターフェイスによる遠隔操作ができなくなってしまうらしい。

「システム起動」

コンディションレッド。システム起動エラー。

起動を試みたが、上手く行かない。

脳波に異常が認められた際は、強制的にチャンネルを切断する安全装置が働く。夢にうなされたり、錯乱状態に陥った場合の暴走を防ぐためだ。

夢。そうだな、これは夢だ。

あの瞬間、迷わず引き鉄を引いていれば、子供の姿に惑わされなければ。そう考える俺が思い描く理想の姿だ。俺は、姿に惑わされることなく、冷酷に引き鉄を引ける。

俺は弾を撃ち尽くしたベレッタを捨て、倒れた相手の銃を奪う。銘柄は分からない。国外の拳銃なのだろう。

背後を駆け抜ける足音が三人分。気を抜くと反響定位もままならないようだ。

俺は銃を構えて備えたが、足音はそのまま階段を降りて行った。

いまのは親玉が二人の護衛を連れて逃げたのだろうが、捕まえることに興味はない。

「アントニオ！」

俺は声を張った。

煙幕も途切れたいま、奴らが残っていれば声に反応して仕掛けてくるはずだ。

「トープか？」

アントニオの声だった。二階廊下の突き当たりにある部屋から聞こえている。

「トープ！ 早く開けてくれ！」

アントニオは部屋に閉じ込められているらしい。

「いま開ける、離れている」

扉のノブ部分を撃ち抜く。

引き戸の扉を開く。部屋から伝わってきた音波の反響は、銃を構えた一人の人間が、銃口を俺に向けていることを示していた。

ここには箱を抱えた少年などいない。俺は迷わず引き鉄を引く。

アントニオは、決して俺を「トープ」とは呼ばない。俺を名前と呼ぶときは、トープと呼ばれる以前の名前である「ミッキー」と呼ぶ。

「アントニオ、無事か？」

アントニオは、以前ソニアがやったように、俺に注意を促すためにいつもと違う呼び方をしたのだ。

「なんとか」

部屋の中にもう一つの気配を感じた俺は、咄嗟に銃口を向ける。すると、両手が上げられる気配が伝わってきた。

「息子だ」

二人仲良く捕まっていたらしい。

## 七. 俺は気に入っている

---

メキシコ合衆国ソノラ州。八割以上を砂漠が占め、西側はコルテス海と面している。

主な産業は、畜産と鉱業、そしてコルテス海を利用した観光業。

最後にもう一つ、アメリカへの密入国斡旋業。俺が生業としている仕事だ。

「おや、旦那。珍しいことで」

注文した料理が運ばれてくるまでに、十五分という時間を要することで有名なトーマスの店で、俺は今日も朝食のタマーレスにかじりついていた。

「怪我はもういいんですかい？」

「ご覧の通りさ」

盲人の俺が、ご覧の通り、という言葉を使うのは、中々にハイセンスなユーモアだと思っている。俺は気に入っている。

「お祝いに乾杯でもしやしょう」

ブレイン・マシン・インターフェイスの機能は、完璧に回復している。いくらテキーラに酔っても、暴走の心配はない。

「奴ら、このノガレスを密輸ルートにしようとしてやがったんですよ」

アントニオが言うには、国境警備の人間を抱き込んでいたらしい。

アントニオが酔いつぶれた頃、店に二人の来客があった。

「トープさん、ヴァイオリンをお返しに来ました」

ソニアとアミーの二人だ。顔を合わせるの、あれ以来となる。

ソニアの父親は、以前から司法取引によってテキサス州に移民することが決まっていたらしい。生活が落ち着けば、ソニアもそこへ向かうことになっている。

「何にも話せなくてごめんなさい」

ソニアは丁寧に謝罪の言葉を述べた。

アントニオの孫であること、父親から預かったディスクを、俺の家の傍に埋めていたこと、他にも黙っていたことはいくつもあるのだろうが、話してはいけないという父親との約束を守った結果だ。ソニアは間違っていない。

「また会いに来てもいいですか？」

俺は大きく首を振って答えた。

いまの俺は、表舞台に立つことを許されぬ身だ。そんな俺に関わっていれば、未来に悪影響を与えてしまいかねない。

俺は地面の下に住む者で、日陰者ですらないのだから。

「私は、世界一のヴァイオリン奏者になるのが夢なんです」と、ソニアは言った。

俺にも夢があった。人生の目標があった。

世界中に音楽を届けたかった。世界一のコンサートホールで、世界一のリサイタルを開きたかった。世界一のヴァイオリン奏者になりたかった。

「トープさんも、ヴァイオリンを止めないでください」

ソニアの純粹な思いが伝わってくる。

盲人の俺が、眩しさを感じている、と言ったら、笑われてしまうのだろうか？

「世界一になったら会いに来い。そのときは一緒に弾いてやろう」

「約束ですよ」

何度も確認してくるソニアの後ろでは、アミーの忍び笑いが響いていた。

その夜、砂漠へと向かった俺は、ただ一人、砂漠の真ん中でヴァイオリンを構えた。

左肩の傷が痛みを発して存在を主張するが、演奏を失敗したときの口実にしてやる。

「システム起動」

意識は上空二万マイルの衛星軌道上へ。

システムオールグリーン。

ソノラ砂漠に散らばる情報収集用のサワロ・センサを使って、ヴァイオリンの音を集音する。その際に集音マイクまでの距離の差を利用して、屋外では起こらないはずの反響による音の重なりを実現する。

砂漠の荒野は、世界一のコンサート会場へと変貌する。ここで行われた演奏は、衛星を通じてどこまでも響きわたるのだ。

ツーソンの家では、アミーがスピーカーの音量を上げた頃だ。

「ヘタクソでも笑うなよ」

こうして、俺はヴァイオリンを演奏して聴かせるというソニアとの約束を果たした。

俺もヴァイオリンを弾き続ける。だから、ソニアは世界一になれ。約束だ。

俺の名はトープ・ソノラ。

トープには、フランス語の「もぐら」以外に、ドイツ語で「場所」という意味があり、ソノラには、スペイン語で「響きわたる・音」という意味があるらしい。

この二つを合わせて都合よく意識すれば「音が響きわたる場所」となる。

俺が毛嫌いしていたトープ・ソノラという名前は、案外心地よいものだったらしい。